令和５年度　看護学部教育課程　　アセスメント結果報告書

１　評価結果

看護学部のDPの評価は、DP1に関して、外部試験を活用した「思考力確認」、看護学系大学協議会が作成した「看護学学士課程教育のための卒業時到達目標」（以下、「到達目標」）、学部教育の学修成果が表れる卒業研究について「卒業研究ルーブリック」を用いている。また、DP2からDP5に関しては、「到達目標」と、4年間のすべての実習を通して実践を記録し、経験の内容や主観的評価から確認する「臨地実習における看護技術確認表」（以下、「看護技術確認表」）」、DP6に関しては、「到達目標」と「卒業研究ルーブリック」を用いている。

アセスメントの結果、DP1については、「思考力確認」において、【選択：思考力総合】、【選択：協働的思考力】、【記述：思考力総合】、【記述：批判的思考力】、【記述：協働的思考力】において、有意に得点が伸びていることが確認された。また、有意差がない項目についても4年次で概ね得点が伸びていることが確認された。これらの結果は、看護教育を含めた教育課程の効果により学生の思考力が育成されていることが示されており、1年次からの思考力の涵養を意識した基礎教養入門をはじめとする基盤教育、また各専門科目における演習・実習などの実践的な学習活動が効果的に機能していることを示唆していると考えられる。一方、「卒業研究ルーブリック」の批判的思考（クリティカルシンキング）の項目が、その他の項目と比較すると最も低値であったため、批判的思考力については、自信の度合いが低い傾向があることが示唆された。

DP2からDP5については、「到達目標」において、看護の基礎的な実践能力（ヒューマンケアの基本に関する能力、根拠に基づき看護を計画的に実践する能力など）についての自信の度合いが高く、看護を取り巻く社会を理解し大学で学ぶ力と看護の基盤をつくることができる学びが概ね得られていることが確認できた一方で、社会の動向を踏まえて看護を創造するための基礎となる能力で自信の度合いが低い傾向が見られた。また、「技術確認表」において、看護師教育の技術項目と卒業時の到達度に、本学の卒業時の到達度が届いていない技術項目が多く、経験の頻度も項目によりばらつきがあることが確認され、看護技術の経験や到達度に課題があることが示唆された。

DP6については、「到達目標」において、専門職として研鑽し続ける実践能力について概ね自信を持つことができていた。「卒業研究ルーブリック」においては、4点までの自己評価で、目的の明確化や研究倫理、論文作成等の項目で8割以上の学生が3点以上としており、看護学を探究し発展させる基盤を身に付けることが出来たと考えられた。

２　今後に向けての改善点

各アセスメント項目を評価し、より多面的で客観的な視点を持つことができるように、批判的思考力を用いて物事をとらえる能力、社会の動向を踏まえて看護を創造するための基礎となる能力の向上を目指した教育内容の充実および、技術経験を積み重ねて到達度が向上するようにし、学生自身が到達度や到達状況を認識できるような学修環境のさらなる充実が課題である。

令和５年度　社会福祉学部教育課程　アセスメント結果報告書

１　評価結果

社会福祉学部のアセスメントは、DP とカリキュラム・ポリシー（CP）に基づき、各 DP に掲げられた能力を育成する関連科目群の GPA の得点傾向で行った。また、DP にかかわる重要な科目でのアセスメント方法として「社会福祉基礎演習ルーブリック」「卒業課題研究ルーブリック」を用いてのアセスメントを行った。

DP1 については、対象学年（1 年生）平均 GPA に比べて、教養科目 GPA は上回っていたが専門基礎科目 GPA は下回っていた。

DP2 では、基礎科目 GPA が対象学年（2 年生）の平均 GPA とほぼ変わらなかった。また、基礎演習科目ルーブリック評価の結果では、演習への取組みに関しての評価が相対的に高い一方で、レポート作成での分析・考察や全体の完成度などといった内容面での評価が低い傾向が見られた。

DP3 については、展開科目群 GPA が対象学年（3 年生）の平均 GPA を上回っていた。

DP4 では、基幹科目群 GPA は対象学年（2 年生）の平均 GPA を下回っていた。

DP5 については、社会福祉学科の発展科目群 GPA が対象学年（4 年生）の平均 GPA を上回っていた。卒業課題研究ルーブリック評価の結果では、あえて挙げるならば考察・結論の妥当性・信頼性とプレゼンテーションの項目で相対的に評価が低かったが、基本的に研究プロセスに関わるどの項目も尺度中点を上回っていた。また、DP6 では、人間福祉学科の発展科目群 GPA が対象学年（4 年生）の平均 GPA を上回っていた。卒業課題研究ルーブリック評価の結果では、こちらもあえて挙げるならば研究背景の明示の項目で評価が低かったけれども、総じてどの項目も尺度中点を上回っていた。

DP1 と DP4 に関する評価が相対的に低いのは、低学年時に履修する社会福祉の中核的基礎科目での専門的知識習得にいくらか苦戦があることを反映しているのかもしれない。その一方、DP3、DP5、DP6 の評価は高いという傾向が見られており、これらは高学年時での実習や卒業課題研究で、これまでの学習の成果を応用的に発揮できているものと解釈することができる。ルーブリック評価からは、レポートや卒業課題研究の研究背景と分析や考察といった点での低評価から、論理的思考や文章表現力での課題が考えられる。

２　今後に向けての改善点

・低学年時の社会福祉系科目の理解度の確認と、カリキュラム上での位置付けの確認。
・論理的思考や文章表現力を向上させる科目の配置に関する検討。

令和５年度 ソフトウェア情報学部教育課程 アセスメント結果報告書

１　評価結果

DP1 は，社会への関心に関わる DP である．卒業年次アンケートより，DP1 について学生の関心度は高いことが示された（根拠資料：卒業年次生アンケート）．また，代表的な科目についても，科目 GPA は十分高く，全体的に成績は良好であり，学修成果が着実に向上していることが示された（根拠資料：成績一覧表）．

DP2 及び DP3 は，課題発見・解決能力，専門知識，幅広い教養に関わる DP である．プロジェクト演習の自己評価では全体的に向上が確認され（根拠資料：プロジェクト演習自己評価），授業評価アンケートでは多数の肯定的評価を得ており（根拠資料：授業に関する授業評価アンケート），代表的な授業科目群の科目 GPA と単位取得状況も良好であることから，学修の成果が示された（根拠資料：成績一覧表，卒業論文最終提出許可サイン）．

DP4 及び DP5 は，自己研鑽力，幅広い教養およびコミュニケーション能力に関わる DP である．卒業研究・制作では DP4 と DP5 の達成が認められ（根拠資料：卒業論文最終提出許可サイン），プロジェクト演習の自己評価でも全体的に向上が見られている（根拠資料：プロジェクト演習自己評価）．また，専門性の高い科目群の単位取得率が高く，科目 GPA も十分に高く，全体的に成績は良好であった（根拠資料：成績一覧表）．

DP6 に関しては，学生が専門知識を深め，数理・情報技術の分野に柔軟に対応する能力を着実に高めていると評価されており，代表的な科目の履修状況とコース演習の合格率からも，専門性の向上が明確に示されている（根拠資料：成績一覧表）．

なお，一部の学生が 4 年次で卒業要件を満たせず卒業できていないことについて，成績を精査したところ，不可となっている科目に偏りはなく，授業やカリキュラムに起因するものでないことを確認した．

以上のことから，カリキュラムが学びの基盤として十分機能していることが確認された．

２　今後に向けての改善点

- 今年度のアセスメント結果において，カリキュラム改定の必要性を示す具体的な結果は得られなかった．しかし，今後の教育の質の向上のために，このアセスメント結果を用いて学部教員が科目内容について検討するなどの活用の可能性を検討していく．
- 4 年次へ進級したものの，卒業要件を満たせないケースについては，既存の評価指標のみでなく個別に精査するなど，今後も注意深く観察し，さらなる改善に活かしていく．

令和５年度　総合政策学部教育課程　アセスメント結果報告書

１　評価結果

今回のアセスメントは、アセスメント・ポリシーの【アセスメントの方法と活用の詳細】における、「１．大学における学習の基盤を築くため基礎的な学力を保持しているかを確認するアセスメント」と「３．専門教育における学習成果を確認するアセスメント」に相当する分析を行った。具体的には、学部教務委員会による「ガイダンスアンケート」と、高等教育推進センター・教育支援本部・教学 IR センターによる「授業に関する学生調査」の 2 種類のデータを用いて、2019 年度入学者から 2023 年度入学者までの各学年を対象に、入学年度別、学年別等での単純集計の推移を把握した。なお、本報告書の作成においては、根拠資料の原案を素材とした学部 FD（2024 年 8 月 21 日（水））と、その後の資料修正内容に対する意見聴取（2024 年 9 月 2 日（月）～11 日（水））を行い、学部教員の多様な視点に基づく評価をなるべく反映する配慮を行った。

分析結果をまとめると、現行カリキュラム導入後の全体的な推移としては、「ガイダンスアンケート」における各 DP・科目群別評価や、「授業に関する学生調査」において、いずれも肯定的評価の増加傾向がみられた。各教員が個々の担当科目の授業改善を通じて、学生の予習・復習への取組などの学習を促したことのプラスの影響が、数値の推移にあらわれたと考えられる。そのため、今回の分析からは、現行カリキュラムの個々の科目や科目群単体では大きな問題点は見られず、DP1、DP2、DP4、DP5、DP6、DP7 のそれぞれについて、大きな問題点は無いと結論付けた。ただし、DP3 については、現行カリキュラムの学部専門科目において DP3 に該当する科目（群）が設定されていないため、評価を行うことができなかった。

２　今後に向けての改善点

来年度に予定されているカリキュラム改定において、DP3 に該当する学部専門科目が設定されていないことに対する DP の改定が必要である。なお、その際には、現行の DP における「コミュニケーション能力」関連項目の整理統合について検討する必要があると考えられる。

また、今回の分析では、使用データの都合上、個々の科目間や科目群間のつながりを直接的に考慮できていない。今後のカリキュラム改定においては、個々の科目や科目群の内容の更なる質の向上に加え、「カリキュラム全体における科目（群）間のつながり」にも目を配る必要がある。

令和５年度　基盤教育　アセスメント結果報告書

１　評価結果

基盤教育（基礎科目・教養科目）のアセスメントは，基盤教育アセスメント・ポリシーにより「学修実態」と「学修成果」の 2 つの側面から実施することとしている。

「学修実態」に関連して，履修選択については，基本的には「興味関心の高さ」や「専門科目に役立つ」を理由として行われるが，学年が進むにつれて選択の動機が多様化している。また，3 年次以降に基盤教育をほとんど履修しない学生が多い学部もあるなど，学部間の差もある。他方，副専攻やデータサイエンス教育に関連して，高学年で履修される授業も存在する一方，学部特性に起因する履修者の偏りも見られる。

授業への関心は授業を通じて総じて高まっていたが，高学年にとっては難易度も下がり，また専門科目の比重も高まることから，基盤教育授業への取組みは低学年のほうが熱心であった。授業レベルのみならず，基盤教育全体の熱心度についても同様である。

「学修成果」に関連して成績を見てみると，大多数の学生が学修目標を概ね達成しているが，十分な水準に達しているとは言えない学生も存在している。一方満足度は基礎科目・教養科目全体で非常に高い。思考力については，3 年次で高まる学部と 4 年次で高まる学部が存在する。英語力については，必修授業がある 1・2 年次とも全学部で上昇が見られた。地域副専攻については，授業の特徴に応じて 5 つの能力の伸びが見られ，修了生に限定すると波はあるものの 5 能力すべてで上昇が見られる。国際副専攻では，低学年次で語学力をはじめとする特定の能力が伸び，その後全体的な伸びが見られた。

２　今後に向けての改善点

通常学年があがるにつれて専門教育の比重が高まる一方，副専攻やデータサイエンス教育の仕組みは高学年次において履修を促す仕組みとして一定の意味があるが，履修する学生の所属する学部に偏りが見られたため，シラバスにおいて専攻分野に関係なくすべての学部の学生に推奨されること，必要な学習支援を講じること等を記載する。プログラムレベルでも，専攻分野に関係なく履修しやすい教育内容・方法を次期改訂までに確立する。

成績（GPA）の低い学生についてはその後退学へつながる可能性もあることから，低 GPA の要因分析を行う。同時に，科目単位で GPA が低い科目や思考力の要因についても同様の分析を行う。分析結果については，全学の FD や会議等で改善に結びつける。

副専攻で育成する能力については，カリキュラム全体の意図と現状が合致するかどうかを検証する。データサイエンス教育については現在のところ能力の評価が個々の授業の成績のみであり，多面的な評価の方策を次期改訂までに確立する。

令和５年度　盛岡短期大学部教育課程　アセスメント結果報告書
【生活科学科生活デザイン専攻】

１　評価結果

DP１については、PROG テストにより、１年次４月および２年次９月のリテラシー・コンピテンシーを測定し、成長分析を行った。１年次、２年次の結果を比べると、各分野で向上した学生もいれば低下した学生もいた。また、教養科目を含む全科目の２年次通算 GPA において、設定する達成基準を満たす者の割合についても点検した。全体的に成績は良好であった。

DP２及び DP３はそれぞれ専攻別の専門知識にかかわる DP である。DP2 は卒業時の成績評価より、専門科目のみを集計した２年次通算 GPA において設定する達成基準を満たす者の割合を点検した。全体的に成績は良好であった。

DP３は二級建築士受験資格取得者に対し「二級建築士学科模擬試験」によって受験に必要な知識の習得度を測定した。アセスメント対象者（建築士登録までの実務経験年数０年）は８人であり、卒業時の知識の習得度合いを認識させた。

課程の総括的な能力である DP4 は、「卒業研究」を通じ、卒業研究梗概集の作成や発表会評価により、問題解決能力や実践力の修得度を測定した。「卒業研究」の成績評価において、設定した達成基準を満たす者の割合を点検し、所定の能力を修得していることが確認できた。修得度は良好であった。

２　今後に向けての改善点

- 直近のカリキュラム改定は令和５年度入学生から行っており、今後数年の達成度の変化についても注意深く観察し、さらなる改善に生かしていく。
- DP1 の「幅広い教養」、DP4 の「課題発見・解決能力」については、より効果的な評価方法についても検討を続ける必要がある。

令和５年度　盛岡短期大学部教育課程　アセスメント結果報告書
【生活科学科食物栄養学専攻】

１　評価結果

DP1、DP4 のコアとなる能力は判断力である。本専攻は食に関する科学的な知識と技能を身につけ、食生活をよりよい方向へ支援する実践能力を兼ね備えた専門職（栄養士）として社会に貢献できる人材の育成を目指している。アセスメントには「PROG テスト」を 1 年次 4 月と 2 年次 9 月に実施し、『知識を活用して問題を解決するリテラシー』と『人と自分にベストな状態をもたらそうとするコンピテンシー』を数値化し、自己の能力を客観的に把握できるようにした。令和 5 年度 2 年生について入学時の結果と比較したところ、リテラシー要素の情報分析力や課題発見力、コンピテンシー要素の統率力や行動持続力などに伸びがみられた。一方、リテラシー要素の構想力や言語・非言語処理能力、コンピテンシー要素の親和力や協働力は、1 年次のスコアより下回っていた。令和 5 年度 1 年生については、過去の 1 年生の結果と比較すると、リテラシー総合は劣るものの、コンピテンシー総合は高スコアであった。

DP2、3 は栄養士に求められる資質や能力の形成を目指している。アセスメントは期末試験の成績から専門的な知識の理解及び技能の習得を確認し、履修指導を重ねるとともに、教育内容の点検を行った。令和 5 年度 1 年生の前・後期通算の GPA は「良」評価に該当する値 2.0 以上が 88.5%、2 年生の 2 年間の GPA は「良」評価に該当する値 2.0 以上が 91.7%であった。また、2 年生に対しては昨年度の改善課題としていた卒業研究での評価を専攻の教員全員で行った。卒業研究の発表会の場においては、積極的に授業に取り組んでいた様子が窺え、すべての学生が「優」評価に該当する結果となった。2 年次の 12 月には学習の集大成として「栄養士実力認定試験」を実施し、専門職としての資質や能力を確認した。平均点については、本学は全国より上回った。各受験者の成績評価については、A が 66.7%、B が 33.3%で、C と D は 0%であった。

２　今後に向けての改善点

令和 5 年度より「PROG テスト」については、1 年次と 2 年次での比較が可能となったことから、今後もデータを蓄積しながら、伸びがみられる部分、伸び悩みがみられる部分について検討していく。「卒業研究」の評価方法については、令和 5 年度に実施した方法を踏まえつつ、専攻の人材育成や能力要素に見合った独自の評価を取り入れながら、さらに検討をすすめていきたい。

令和５年度　盛岡短期大学部教育課程　アセスメント結果報告書
【国際文化学科】

１　評価結果

DP1 についてはPROG テスト、卒業研究においてアセスメントを行った。大学での学修に必要な基礎力を着実につけるとともに各科目が相互に、学生の主体的行動を促すよう比較的良好なかたちで連動しているといえる。DP2 に関しては西洋・アジア・日本の文化や社会、交流の歴史について基礎から研究法、演習に至るカリキュラム構成の中で効果的に学習できるよう配慮されており、三地域における学修は適切に行われているといえる。DP3 に関しては、学生の自主的なインターンシップ参加に加え、正課での海外研修、地域でのフィールドワークなども取り入れることにより、学生の主体的な社会参加を促し、地域の課題や振興に対する関心を高めていると判断できる。DP4 に関しては TOEIC テストなどの英語能力の客観的評価に資するツールの受験を学生に奨励し、実践的能力を培うことで、コミュニケーション能力の向上に努めていると評価できる。以上より、DP1 から DP4 についておおむね十分な学修成果が認められると判断できる。

令和６年度からの新カリキュラムにより、DP1 に関しては、教養科目の内容に関する質的充実を図っている。DP3 に関しては東北地方に限定した地域学習と、国際的視野を持った地域学習との間にいかに有機的連関を持たせるかが課題である。DP4 について、令和６年度からの新カリキュラムにより、第二外国語科目を必修とし新たにインドネシア語を導入するとともに、基礎クラスと上級クラスの学習内容を明確化することによって、第二外国語科目における確かな基礎力と実践的コミュニケーション能力の涵養を目指している。

２　今後に向けての改善点

・DP1 の基盤教養科目の内容の質的充実に関しては、令和６年度からの新カリキュラムにより、抜本的改善を図っているところであるが、今後も着実に科目内容のレベルアップを進めたい。

・DP3 の地域学習と、国際的視野を持った地域学習との間の連関については、令和６年度からの新カリキュラムにより、適宜改善を図っている。

・DP4 の第二外国語授業内容の充実に関しては、令和６年度からの新カリキュラムで新たに発展的科目の設定を行うなどして、より質の高い語学授業を展開している。科目ごとの履修者数の増減に注意を払いつつ、質の高い授業内容を保証したい。

令和５年度　宮古短期大学部教育課程　アセスメント結果報告書

１　評価結果

DP１については、１年次と２年次に実施したPROGテストにおいてDP１に関連する課題発見力、構想力、言語処理能力、非言語処理能力、１年次６月及び２年次12月に実施したTOEIC Bridgeによる語学力、DP１に関連する基盤教育科目の成績評価による成長分析を行った。PROGテストの結果（根拠資料１：「PROGテスト結果(2023)」）、TOIEC Bridgeの結果（根拠資料２：「TOEIC実施結果(2023)」）、基盤教育の結果（根拠資料３：「科目平均GPA(2023)」）から多くの項目で１年次から２年次にかけての成長が見られた。また、PROGテストにおいて外部と比較においても大きな差異は見られなかった。以上から学修の効果があらわれていると評価できる。

DP２については、PROGテストにおいてDP２に関連する親和力、統率力、DP２に関連する基盤教育科目及びゼミ科目の成績評価による分析を行った。PROGの結果、基盤教育の結果、ゼミ科目の成績評価から多くの項目で１年次から２年次にかけての成長が見られたが、統率力に関しては低下傾向となっている。以上からおおむね学修の効果が表れていると評価できる。

DP３及びDP４については、PROGテストにおいてDP３に関連する協働力、行動持続力、DP３に関連する専門教育科目及びキャリア科目、DP４に関する専門教育科目及び特別研究における分析を行った。PROGの結果、専門教育の結果、キャリア教育の結果、特別研究の成績結果から学年進行による難易度の向上の影響もあり、多くの項目で１年次から２年次にかけての成長に低下傾向が見られた。以上からおおむね学修の効果が表れていると評価できるが今後、学生に対し更なる分かりやすい授業を行っていく必要があると考えられる。

DP５については、PROGテストにおいてDP５に関連する課題発見能力、特別研究における分析を行った。PROGの結果、特別研究の成績結果から多くの項目で１年次から２年次にかけての成長が見られた。以上から学修の効果があらわれていると評価できる。

２　今後に向けての改善点

DP３、４については、学年進行による難易度の向上を把握し、分析する必要がある。

学部FD等で、学生情報の共有を行い更なる授業改善に役立てていく。

令和５年度　看護学研究科博士前期課程　アセスメント結果報告書

１　評価結果

DP１「看護学の理論に基づき、看護実践を分析し、記述することができる」については、DP1 に係る各科目で自己の実践を振り返る授業が行われており、看護学の理論に基づき看護実践を分析し、記述できるようになった。1 年次の学生は、全員が社会人であり、多くの学生が長期履修を利用して、DP1 に係る 1 年次に履修登録した科目の単位修得ができた。2 年次の学生は、DP1 に係る各科目の単位修得ができ、研究論文を作成し、審査での指摘を修正する過程で、看護学の理論に基づき看護実践を分析し、記述する能力が培われ、秋季に 3 名、通常期に 3 名が論文審査に合格した。

DP2「独創性や発展可能性のある学術的に有用な看護学研究を行うことができる」については、1 年次の学生は DP2 に係る科目の看護研究法Ⅰ・Ⅱを単位修得し、看護学研究を行う基盤を身に付けることができた。主指導及び副指導教員による研究指導や、主指導教員の面接による学修の進捗への支援を受け、看護研究を推進する能力を身に付けることができた。2 年次の学生は、研究課題を明確にし、独創性や発展可能性のある学術的に有用な学位論文を作成でき、秋季に 3 名、通常期に 3 名が論文審査に合格し、修了者全員が 3 月 18 日に学位論文発表会（遠隔）で発表した。

DP3「看護専門職としての看護実践能力・教育力・研究力・管理能力を養うことができる」については、DP3 に係る科目の学修を通し、1 年次学生 11 名中 4 名、及び長期履修の 2 年次学生も 2 名が倫理審査会を受け、研究計画が承認された。学生は、看護の臨床や教育現場から見出した研究課題への取り組みを通して、看護実践・看護教育・看護研究・看護管理に資する研究成果を得ることができ、DP3 に掲げる能力の向上を図ることができた。

本研究科の大学院生は社会人入学者がほとんどである。学生は希望する科目の単位の修得及び研究論文の作成により看護実践能力・教育力・研究力・管理能力を培い、修了後の進路に応じてこれら能力の向上が図れたと評価する。

２　今後に向けての改善点

令和 5 年度に実施した修了時アンケートでは、修了生から、職場と大学院での学修の両立の困難に関する多くの意見がみられた。学生と職場の管理者から、基本的な修了年限（2 年）で学修が終えられるような指導の工夫を求める意見が多かった。具体的には、1 年次の授業の遠隔化や、研究指導において個別ゼミを強化することへの要望がみられた。

受験相談の段階で、大学院での学修プランを具体的にイメージし、職場との調整等を十分に行った上で、大学院での学修を開始できるような支援を継続すると共に、大学院での学習が進んだ段階で、学習計画を再確認することが必要で、学生が社会人であることを前提とした研究科の授業の工夫を検討する段階にあると考える。

また、入学時アンケートでは、研究計画を進めるために、DP2 に係る科目である看護研究法Ⅰ、Ⅱの開講時期、文献検索、クリティークに関する授業の時期を早めることへの要望がみられた。2023 年度は看護学研究科研究倫理審査会の機会を増やし、研究活動がスムーズにできるようにしたが、増やした倫理審査の機会を良く活用できるように、授業科目の配置や授業方法の見直しを行うことが課題である。

令和５年度　社会福祉学研究科博士前期課程　アセスメント結果報告書

１　評価結果

前期課程の総合福祉コース（以下、総合福祉）・臨床心理コース（以下、臨床心理）の科目群には複数の DP が関連し、DP 相関はコースで異なる[1]。令和 5 年度から PCH 構想[2]に基づき科目群(モジュール)の基底を変更し DP 相関も再構成[1]した為、1 年次は新科目群、2 年次は前科目群の平均 GPA[3]に基づき学修成果（科目群の DP 達成への寄与）を評価した。

（１）1 年次の新科目群及び関連 DP（総合福祉 / 臨床心理）は、「基盤科目群」(DP1・5・6 / DP1)、「公共・総合マネジメント学科目群（DP1・2・5 / DP1・2)、「臨床・実践学科目群」(DP2・3・5 / DP2・3・4)、「人間科学科目群」(DP5・6 / DP3・4・6)、「心理科目群」（臨床心理のみ履修、DP3・4)、「実習科目群」（DP5 / DP4)、研究指導Ⅰ（DP6 / DP6）である。なお、DP4 は臨床心理のみ、DP5 は総合福祉(社会人)のみに対応している。このうち、「基盤科目群」(総合福祉 DP1・5・6)が 0.12 ポイント、「人間科学科目群」（臨床心理 DP3・4・6）が 0.05 ポイント、「心理科目群(臨床心理のみ設定)」（DP3・4）が 0.04 ポイント、それぞれ優水準(3.0)より低いが差異は僅かで、特段の課題は見られない。それ以外の科目群の平均 GPA は両コースとも全て「優」水準(3.0)であった。以上、両コースとも各 DP 関連の新科目群平均 GPA は概ね優秀と評価される水準を達成し、学修成果が認められる。

（２）2 年次の科目群と関連 DP（総合福祉 / 臨床福祉）では、「理論研究科目群」（DP1・3・5・6 / DP3・4・6）の平均 GPA は両コースとも「優」水準で学修成果が認められる。「課題研究科目群」（DP1・2・3・5 / DP3・4）は、「優」水準の総合福祉と比べ臨床心理（DP3・4）の平均 GPA は 0.33 ポイント低い。また、「実習科目群」（臨床心理のみ DP4）の平均 GPA は「優」水準より 0.17 ポイント低くいずれも改善の余地がある。「研究指導Ⅱ(または学位論文)」（DP6 / DP6）は、平均得点率が総合福祉 66.6%、臨床心理は 77.3%で、総合福祉は臨床心理より 10.7 ポイント低く、学習成果に課題がある。以上の通り、2 年次全体では一定の学修成果は表れてはいるものの、臨床心理の「課題研究科目群」「実習科目群」、総合福祉の「研究指導Ⅱ」に関しては課題があり、改善策を検討する必要がある。

２　今後に向けての改善点

新科目群に関しては、PCH 構想に則り科目内容等の更なる改善を進める。2 年次の「課題研究科目群」(臨床心理 DP3・4)は新科目群に移行後も、引き続き演習改善を図る。「実習科目群」（臨床心理 DP4）と「研究指導Ⅱ」(総合福祉 DP6)は、新科目群でも継続する。「実習科目群」は学外実習の評価も入る為、実習前学習や実習後の省察、言語化等を高め学修成果の改善を図る。「研究指導Ⅱ」は、評価基準に照らし研究指導方法を検討し改善を図る。

1　総合福祉コース・臨床心理コースの新旧カリキュラムマップを参照
2　社会科学（政策 P、臨床 C)・人間科学 H の領域を基底に各専門研究とのトランスファラブルな学修達成を意図した
3　科目群ごとの平均 GPA によるアセスメント一覧を参照

令和５年度　ソフトウェア情報学研究科博士前期課程　アセスメント結果報告書

１　評価結果

DP１は、学習、研究遂行能力に関するDPである。令和４年度と比較して、令和５年度の全科目平均GPAスコアが低下していた（根拠資料：成績統計Ⅱ）。2年生の研究遂行能力については、公開ゼミナール、修士学位論文審査において身についていることを主査、副査が確認した（根拠資料：学位論文予備審査、修士学位論文審査）。

DP2は、社会的責任に関するDPである。1年生においては、研究者倫理についてリサーチリテラシAの単位取得にて確認した（根拠資料：成績統計Ⅰ）。2年生においては、予備審査、論文審査において身についていることを主査、副査が確認した（根拠資料：学位論文予備審査、修士学位論文審査）。

DP3は、問題解決に関するDPである。1年生においてはソフトウェア実践演習およびプロジェクト実践演習の単位取得にて確認した（根拠資料：成績統計Ⅰ）。2年生においては、予備審査、論文審査において身についていることを主査、副査が確認した（根拠資料：学位論文予備審査、修士学位論文審査）。

DP4は、専門知識に関するDPである。1年生においては専門科目の単位取得にて確認した（根拠資料：成績統計Ⅰ）。2年生においては、論文審査において身についていることを主査、副査が確認した（根拠資料：修士学位論文審査）。

DP5は、コミュニケーション、プレゼンテーションに関するDPである。1年生においては、基盤科目のリサーチリテラシA・B、サイエンスコミュニケーションの受講にて一定レベルへの到達を確認した（根拠資料：成績統計Ⅰ）。2年生においては、公開ゼミナール、学位論文予備審査において身についていることを主査、副査が確認した（根拠資料：公開ゼミナール、学位論文予備審査）。

２　今後に向けての改善点

- GPAスコアの低下
  履修取消などを伴わない履修放棄のような事例も見受けられ、学生の取り組み姿勢も含めGPAスコアの低下の原因の解明を行いたい。
- 授業評価アンケート
  令和５年度は、研究科の科目は学生調査の対象外となったため、データが存在していない。令和６年度以降に向けて、定量的な評価方法を検討したい。

令和５年度　総合政策研究科博士前期課程　アセスメント結果報告書

１　評価結果

DP1 については、講義科目の受講、日々のゼミ活動や学生間での意見交換などを通じて育まれると考える。その成果は、「①研究成果報告書」、「②研究計画書*」、「③研究成果発表会」によって確認した。なお、②はこれまで「研究指導計画書」としていたが、教員による指導計画ではなく、学生が主体となって研究計画を立てる意識を強めるために、「研究計画書」と名称をあらためた。

DP2 については、講義科目の受講、教員・学生との意見交換、研究発表などを通じて気づき、研究テーマは常に方向性を意識して適切に修正し続けることが望ましいと考える。とくに２年次の「②研究計画書」の作成において、適切に研究の方向性が考えられているかを確認できる。その他の「③研究成果発表会」、「④修士論文構想発表会」、「⑤修士論文」、「⑥修士論文発表会」と合わせて、一つの考えに固執せず、研究活動が適切に進められてきたことを確認した。

DP3 については、所属ゼミでの指導や所属学会への参加等により分析法を学ぶとともに、「③研究成果発表会」や「④修士論文構想発表会」でのゼミ外教員からの助言・指導などにより、気づかなかった視点からの分析・考察も深まると考える。その成果は、「①研究成果報告書」、「③研究成果発表会」、「④修士論文構想発表会」によって確認した。

DP4 については、所属ゼミでの指導の他に、発表会等でのゼミ外教員による指摘・助言を参考にすることで成長すると考える。その成果は、「①研究成果報告書」、「②研究計画書」、「③研究成果発表会」、「④修士論文構想発表会」、「⑤修士論文発表会」、「⑥修士論文」によって確認できる。修士論文の執筆に至る多くの発表会・報告書に基づき、複数視点からの分析、総合的考察によって修士論文が構成されていることを確認した。

DP5 については、「③研究成果発表会」、「④修士論文構想発表会」、「⑤修士論文発表会」等の機会に確認できる。発表時のデータ提示とその説明、質疑に対する受け答えから、自身の考えを第三者に伝える能力が備わっていることを確認した。

２　今後に向けての改善点

社会人学生が多いこともあり、在学期間のうちに学会発表したり学術誌に論文投稿したりする時間的余裕が無い。全国的な学会等への参加によって自身の研究テーマや研究方法を見直すきっかけになるが、その機会を十分に活かせていない。先輩の活動の様子を見て後輩も研究を進めるため、在学中に全国学会に参加すること、論文を投稿することが当然という空気をつくり出したい。